知恵の羅針盤

道具学倶楽部 部長、道具学会 理事
山口昌伴
Masatomo YAMAGUCHI

朝顔

男子小便器を見なおす

東京の西端、八王子の旧家に招かれ、一夕の小宴、ちょっと失礼、と小用に立った。旧家だから昔の厠がまえ。お客が多いので男子用小便器が三基。洋風ストールじゃなくて、和風の「あさがお」と呼ばれたもの。その端っこの朝顔の前に木台が据えてある。幼い男の子、珍宝がとどかないから――この家、男児のおむつがとれたらすぐ、男子用便器に立たせるのかぁ――この家の子は男ぶりのいい男子に育つぞ、と思った。

男は男らしく女は女らしく

西多摩地域は江戸城下とはちがって群雄割拠の時代が続き、地域の社会秩序を守る厳しい闘いの世界だった。そこを勝ちぬいた豪族の末裔のお屋敷だから、この家には男子の成長に気を配る家風がみえる。男尊女卑をいうのではない。男は男らしく女は女らしく、あるべきだと男子用小便器が言い張ってた、のを報告したまでである。昔、この地では、地域で重要な位置を占める家の男児には、地域の総代がより集まって、その男ぶりにみあう賢女を娶あわせた。男ぶりと女ぶりが互いに高めあう。男がすたれば女がすたる。そういう男女平等雇用いや活用社会の伝統を私は朝顔に覗き見る思いがしたのであった。

京の町家でも朝顔に印象がひとつある。親戚筋の白寿の翁が逝ったので弔問に訪ねたのだが、その家の縁側の先にある厠で古びた朝顔一基に見入った。この家、子だくさんだったがみな女の子、女系家族で男は逝った翁ひとりきり。その一人の男だけが専ら用いて七〇有余年。社会をわたり家族を養い子孫を育てた男の存在証明として薄暗がりにひっそり佇むのが、このたび主を失った朝顔一基だった。

もう一平米で男の立つ瀬

都内豪華マンションにお招きの一夕、小用に立ったらトイレはもちろん洋式腰掛便器一穴。その便座、蓋からスリッパまで精緻な刺繍、敷物も壁に掛けたパッチワークやキルトも手づくり――奥さま手芸ギャラリーで小便のやり場に困った。今どきの住まい、男の立つ瀬がなくなってる、とは思いすぎだろうか。

とある住宅設計の打ち合わせで、私はつい八王子の「朝顔の力」を思いつつ、トイレに男子小便器を――ご予算から一〇〇平米ほどの空間、男らしい男児が育つのに一平米つかってもいいんじゃありませんか、と持ち出したら、奥さま「だれがおそうじしてるとお思い!?」の一撃。ご亭主は無言、であった。

でも腰掛便器に立ち小便では、見えない飛沫がずいぶん汚れるもとになっている。世の奥さま方、男の子にも腰掛けでおしっこしなさい、と躾ているようだが、男子の女性化を勧めるような気が――団塊世代以前の古い男の偏見旧見だろうか。男子小便器を設けて、男子たるもの朝顔は自分で磨けと躾たら、どうです。

日本古来の小便器の祖型、猿頬桶（えてぼうおけ）をアレンジした和風ストール「朝顔」。写真提供／INAXライブミュージアム